

近年の経済学・経営学分野の注目書籍

2017年11月3日発表

大阪大学社会経済研究所 大竹文雄

日経・経済図書文化賞においては、経済学や経営学の優れた研究書を中心に選考が行われてきた。教科書、過去の受賞者や審査員の書物、外国人著者の日本語への翻訳書は原則的に対象外としてきた。しかし、経済学・経営学の書籍の中で、研究書に限らず優れたものを読みたいという要望は多いと考えられる。実際、近年の経済学関連の書籍をみると、非常に優れた啓蒙書や教科書が数多く出版されている。ここでは、日経・経済図書文化賞の選考に関わられた方々から注目の書籍として挙げて頂いたものを中心に紹介する。

1. 教科書の著作

最近の経済学の教科書の中で、多くの関係者が推薦したのは、**神取道宏著『ミクロ経済学の力』(2014)**である。ミクロ経済学を学ぶ際、抽象的な数学モデルが中心になり、それが現実の経済問題とどう関係するのかが分かりにくかった。神取氏の本は、現実の経済問題と常に関連させながら、中級レベルのミクロ経済学を習得できる非常に優れた教科書になっている。企業の費用曲線を学んだ直後に、現実の電力会社の費用曲線を導き、消費者余剰と生産者余剰を学ぶと、筆者が現実のデータからコメの自由化の余剰分析をしてみせることで、読者は経済学に基づく思考力（エコノミック・リテラシー）を実感できる。

似た特色を持つマクロ経済学の教科書は、**齊藤誠・岩本康志・太田聰一・柴田章久著『マクロ経済学新版』(2016)**である。日本のマクロ統計や金融制度を丁寧に紹介している点に特色がある。また、**二神孝一・堀敬一著『マクロ経済学 第2版』(2017)**は理論と実証のバランスが良いという評価を受けている。

統計学・計量経済学でも優れた啓蒙書と教科書が次々と出版されている。本年の受賞図書である**伊藤公一朗著『データ分析の力』(2017)**もその一つである。この分野では、**中室牧子・津川友介著『「原因と結果」の経済学』(2017)**も統計的因果推論の入門書として評価が高い。計量経済学の入門書としては、**田中隆一著『計量経済学の第一歩』(2015)**、**山本勲『実証分析のための計量経済学』(2015)**などが出版されている。最近の計量経済学の入門書は、統計ソフトで実習しながら理解を深めていくことを前提に書かれているのも特色である。

経済学の応用分野でも優れた教科書が出版されている。**内田浩史著『金融』(2017)**は、入門から最新のテーマまで取り入れた上、説明が分かりやすい優れた教科書として評価が高かった。この分野では、**岩村充著『中央銀行が終わる日』(2016)**と**早川英男著『金融政策の「誤解」』(2016)**も最近の金融の動きを概観する上で評価の高い本である。

経済史の分野では、**岡崎哲二著『コア・テキスト経済史 増補版』(2016)**が、時代ごとではなくテーマごとに構成されている上、経済論との親和性が高い教科書として多くの推薦を受けた。本年度のノーベ

ル経済学賞の受賞分野である行動経済学でも優れた日本語の教科書が刊行されている。大垣昌夫・田中沙織『行動経済学』(2016)は、伝統的経済学と行動経済学の関連を強調した学部上級から大学院初級のテキストとして評価が高い。また、下村研一『実験経済学入門』(2015)という教科書が出版されたことも、経済学の動きを反映している。

人事経済学の分野では、大湾秀雄著『日本の人事を科学する』(2017)が、どの企業にも存在する企業の人事データを人事政策に活かすためのデータ分析の手法を学ぶテキストとして有益である。紹介されている研究例も参考になる。中室牧子著『学力の経済学』(2015)は、最近のエビデンスに基づいた教育の経済学の概要を一般向けに紹介した書物として多くの人に読まれた。

黒崎卓・栗田匡相著『ストーリーで学ぶ開発経済学』(2016)は、架空の国の日常から課題を抽出し、経済学で解決策や政策提言を行うという斬新なスタイルで最新の理論を紹介している。小西砂千夫著『日本地方財政史』(2017)は、過去の経緯を踏まえて、日本の地方財政の制度と実務をバランスよく説明している。坂井豊貴著『社会的選択理論への招待』(2013)は、日本語の教科書としては比較的珍しい社会的選択理論の本格的な教科書である。伊藤隆敏著『公共政策入門』(2017)は、公共政策を学ぶためのミクロ経済学の教科書としてユニークなものである。

2. 過去の受賞者による著作、本賞の審査委員による著作など

過去の受賞者の著作で注目を集めた本も多い。吉川洋著『人口と日本経済』(2016)は、経済成長の源泉が、人口成長ではなくイノベーションであることを説得的に示した。岩井克人著『経済学の宇宙』(2015)は、岩井氏自身の経済学研究遍歴を通じて、独創的な思考法や資本主義や企業に対するものの見方を学ぶことができる。猪木武徳著『経済学に何ができるのか』(2012)は、経済と社会や思想との関係を平明でありながら深く論じた書籍である。齊藤誠著『震災復興の経済学』(2015)および齊藤誠編『震災と経済』(2015)も多くの委員が推薦した。前者は、原発危機に関するデータを詳細に分析し、意思決定に際し、軽視されていた事実やとらわれていた先入観を明らかにし、政策の過剰や不徹底を反省し将来への教訓を導き出している。後者は東日本大震災の経済的影響についてのミクロ・マクロ両面からの包括的研究で、後世代に伝えるべき知識が豊富に含まれている。

清田構造著『日本の比較優位』(2016)は、貿易理論で最も有名な比較優位理論が日本について成り立っているのかという問題について、厳密な実証分析を行った研究書として高い評価を受けた。鈴木亘著『経済学者 日本の最貧困地域に挑む』(2016)は、鈴木氏が大阪市西成区のあいりん地域の活性化に様々な利害対立を克服して取り組んだ記録である。意見の調整を行うリーダーとして、経済学の思考法が有益であることを説得的に示している。玄田有史編『人手不足なのになぜ賃金は上がらないのか?』(2017)は、様々な角度から賃金が伸び悩む要因について論じている。現時点では確定的な答えは得られていないが、制度、規制、人口構成の変化、過去の動きの反動など、仮説を整理できる。齊藤修著『環境の経済史』(2014)および翁邦雄著『金利と経済』(2017)も注目すべき本として推薦があった。

3. 外国人著者による日本語訳書

近年、外国人による優れた著作の翻訳書も多い。トップ1%への所得・資産の集中を明らかにしたピ

ケティ著『21世紀の資本』(2014)がベストセラーになったことは記憶に新しい。所得の不平等に関する優れた翻訳書が相次いだ。アトキンソン著『21世紀の不平等』(2015)、ディートン著『大脱出』(2014)、ミラノヴィッチ著『大不平等』(2017)である。アトキンソンは、不平等について広い視点から議論し、様々な具体的な政策提言を行っている。2015年のノーベル経済学賞を受賞したディートンは、経済成長と格差・貧困の相互作用を富と健康の両方に視点からエビデンスに基づき歴史的に分析している。ミラノヴィッチは、グローバルな不平等の動きをエレファント・カーブという象徴的なグラフをもとに議論している。こうした格差問題に経済理論がどう対応すべきかを議論したバスー著『見えざる手をこえて』(2016)も注目すべき書物である。経済学に、利他的、道徳的な基盤を導入するという行動経済学的手法から経済学の漸進的改革を目指している。また、ミンツバーク著『私たちはどこまで資本主義に従うのか』(2015)は、経営学における世界の第一人者が企業を超えて社会のレベルで議論している著書であり、欧米型資本主義に懐疑的なものとなっている。

2017年のノーベル賞受賞者は、行動経済学の発展に大きく寄与した米シカゴ大学のリチャード・セイラー教授である。セイラー著『行動経済学の逆襲』(2016)は、彼自身の研究成果をわかりやすく説明するとともに、行動経済学の黎明期に伝統的経済学との間にどのような確執があり、それを乗り越えてきたか、ということを示している。ノーベル経済学賞受賞者のアカロフ・シラー著『不道徳な見えざる手』(2017)、現実の市場が操作と詐術に満ちているという問題点を指摘し、新たな理論を構築することの必要性を行動経済学の観点から論じている。ボウルズ著『モラル・エコノミー』(2017)は、道徳とインセンティブを二極に置いて行動経済学の成果を取り入れて経済学を構築するという好著である。2005年のノーベル経済学受賞者によるシェリング著『ミクロ動機とマクロ行動』(2016)は、1978年に原書が出版された名著の翻訳であるが、わずかな個人の差別的な傾向が経済全体として大きな差をもたらすということを示した点で、行動経済学とも関わりがある。

金融分野でも注目すべき書籍がある。ロゴフ著『現金の呪い』(2017)は、現金の闇の部分、そして進行しつつある「レスキャッシュ社会」(現金の少ない社会)への移行の意義を明らかにしつつ、いま起きている歴史的な変化の意味を理解させてくれる良書である。ズックマン著『失われた国家の富』(2015)はタックス・ヘイブンの実態を経済学的に分析した書籍である。金融危機に関する良書として、ミアン他著『ハウス・オブ・デッド』とブレンダー著『金融危機はまた起こる』の推薦があった。前者は、住宅価格の下落で米国の家計が過剰債務に陥ったことが2008年の米国の金融危機を引き起こしたことを学術的に高度な内容を平易に説明している。後者は、フィナンシャル・タイムズの名物コラムニストが、過去、現在、および未来の資本主義のあり方を論じたものである。歴史を振り返りながら、資本主義は本源的に不安定で、公正な社会を実現できてこなかったことを解き明かしている。

一方、民主主義や法の支配など、文明発展の柱のひとつひとつが古びていることが西洋の衰退の原因だということをファーガソン著『劣化国家』(2013)は、わかりやすく説明している。さらに、経済的に豊かで政治的に民主化された一部の国々と、経済的・政治的な発展が遅れた多くの国々という2つのグループに世界の国が分かれている理由についてはノース他著『暴力と社会秩序』(2017)が興味深い解答を提示している。

人工知能をはじめとする技術革新についての本も多く出版されているが、翻訳書の中にも注目される

ものがある。ブリニョルフソン他『機械との競争』(2013)は、累乗成長、編集によるイノベーションなど3つの特徴から、AI登場後の世界を語ろうとする視点が興味深い。ヨッフィ・クスmano共著『ストラテジー・ルールズ』(2016)は、ビル・ゲイツ、アンディ・グローブ、スティーブ・ジョブズというIT産業に大きく貢献したIT企業の経営について1次データも駆使して分析している。

価格メカニズムではなく、コンピューターを使った新しい資源分配の手法として注目されているマッチング理論がある。ロス著『Who Gets What』(2016)は、2012年のノーベル経済学賞受賞者による著作で、病院の研修医のマッチングや学校選択など事例に基づきながらマッチング理論という最新の経済理論とその有用性をわかりやすく解説した書物である。結婚相手を探すのもマッチングである。オイヤー著『オンラインデートで学ぶ経済学』(2016)はオンラインデートという新しい仕組みをもとに、サーチ理論やチープトークといった経済学の概念を紹介している優れた啓蒙書である。

むすびにかえて

以上のように、日経・経済図書文化賞の対象外とされてきた分野の書籍で、多くの優れた著作が刊行されてきたことがご理解頂けると思う。特に、教科書分野では、最新の経済学を反映しつつ現実経済やデータとの関連を反映したもので、非常にわかりやすいものが増えている。教科書は、先人達の知恵の結晶であり、経済学への入り口でもある。優れた教科書の出版が増えているのは、経済学への期待が高まり、有効に利用したいという需要の増加が背景にあり、第一線の研究者もそれに応えているのである。過去の受賞者も力量のある著者が多くだけに、さすがに読み応えのある著作を出版している。テーマも急激な時代の変化に直面して、限られた情報から喫緊の課題に果敢な分析を試みるもの、長期的な経済課題を展望するもの、歴史を振り返りつつ現代を問い直すものなど、様々であるが、いずれも重要な役割を果たしている。また、外国人の一流著者の書物がタイムリーに出版されている。グローバル化の進展に伴って、日本にとっても将来の経済・ビジネス課題に備える上で格好の準備材料になっている。そうした優れた書物が日本語翻訳で手軽に読めるのはありがたい。日経・経済図書文化賞の受賞作に限らず、国内外の独創性にあふれた秀逸な書籍にも社会の関心が高まることに今後も期待したい。

(次のページより、上記で挙げられた書籍のリストをご覧ください)

「注目書籍」リスト

1. 教科書の著作

著者名	書籍名	出版社	出版年
伊藤公一朗	データ分析の力	光文社	2017
伊藤隆敏	公共政策入門 ミクロ経済学的アプローチ	日本評論社	2017
岩村充	中央銀行が終わる日 ビットコインと通貨の未来	新潮社	2016
内田浩史	金融	有斐閣	2016
大垣昌夫・田中沙織	行動経済学 伝統的経済学との統合による新しい経済学を目指して	有斐閣	2014
大湾秀雄	日本の人事を科学する 因果推論に基づくデータ活用	日本経済新聞出版社	2017
岡崎哲二	コア・テキスト経済史 増補版	新世社	2016
神取道宏	ミクロ経済学の力	日本評論社	2014
黒崎卓・栗田匡相	ストーリーで学ぶ開発経済学 途上国の暮らしを考える	有斐閣	2016
小西砂千夫	日本地方財政史 制度の背景と文脈をとらえる	有斐閣	2017
齊藤誠・岩本康志・ 太田聡一・柴田章久	マクロ経済学 新版	有斐閣	2016
坂井豊貴	社会的選択理論への招待 投票と多数決の科学	日本評論社	2013
下村研一	実験経済学入門	新世社	2015
田中隆一	計量経済学の第一歩 実証分析のススメ	有斐閣	2015
中室牧子	学力の経済学	ディスカヴァー・ トゥエンティワン	2015
中室牧子・津川友介	「原因と結果」の経済学 データから真実を見抜く思考法	ダイヤモンド社	2017
早川英男	金融政策の「誤解」 “壮大な実験”の成果と限界	慶應義塾大学出版会	2016
二神孝一・堀敬一	マクロ経済学 第2版	有斐閣	2017
山本勲	実証分析のための計量経済学 正しい手法と結果の読み方	中央経済社	2015

2. 過去の受賞者による著作、本賞の審査委員による著作など

著者名	書籍名	出版社	出版年
岩井克人	経済学の宇宙	日本経済新聞出版社	2015
猪木武徳	経済学に何ができるか 文明社会の制度的枠組み	中央公論新社	2012
翁邦雄	金利と経済 高まるリスクと残された処方箋	ダイヤモンド社	2017
清田耕造	日本の比較優位 国際貿易の変遷と源泉	慶應義塾大学出版会	2016
玄田有史ほか	人手不足なのになぜ賃金は上がらないのか	慶應義塾大学出版会	2017
斎藤修	環境の経済史 森林・市場・国家	岩波書店	2014
齊藤誠	震災復興の政治経済学 津波被災と原発危機の分離と交錯	日本評論社	2015
齊藤誠(編)	大震災に学ぶ社会科学 第4巻 震災と経済	東洋経済新報社	2015
鈴木亘	経済学者 日本の再貧困地域に挑む	東洋経済新報社	2016
吉川洋	人口と日本経済	中央公論新社	2016

3. 外国人著者による日本語訳書

著者名	書籍名	出版社	出版年
ジョージ・A・アカロフ、 ロバート・シラー	不道德な見えざる手 自由市場は人間の弱みにつけ込む	東洋経済新報社	2017
アンソニー・B・アトキンソン	21世紀の不平等	東洋経済新報社	2015
ポール・オイヤー	オンラインデートで学ぶ経済学	NTT 出版	2016
トーマス・シェリング	マイクロ動機とマクロ行動	勁草書房	2016
ガブリエル・ズックマン	失われた国家の富 タックス・ヘイブンの経済学	NTT 出版	2015
リチャード・セイラー	行動経済学の逆襲	早川書房	2016
アンガス・ディートン	大脱出 健康、お金、格差の起原	みすず書房	2014
カウシック・バスター	見えざる手をこえて 新しい経済学のために	NTT 出版	2016
トマ・ピケティ	21世紀の資本	みすず書房	2014
ニール・ファーガソン	劣化国家	東洋経済新報社	2013
エリック・ブリニョルフソン、 アンドリュー・マカフィー	機械との競争	日経 BP 社	2013
ジョン・ブレンダー	金融危機はまた起こる 歴史に学ぶ資本主義	白水社	2016
サミュエル・ボウルズ	モラル・エコノミー インセンティブか善き市民か	NTT 出版	2017
ケネス・S・ロゴフ	現金の呪い 紙幣をいつ廃止するか?	日経 BP 社	2017
アルビン・E・ロス	Who Gets What (フー・ゲッツ・ホワット) マッチメイキング とマーケットデザインの新しい経済学	日本経済新聞出版社	2016
ダグラス・ノース、ジョン・J・ ウォリス、バリー・R・ワイン ガスト	暴力と社会秩序 制度の歴史学のために	NTT 出版	2017
アティフ・ミアン、 アミール・サフィ	ハウス・オブ・デット	東洋経済新報社	2015
ブランコ・ミラノヴィッチ	大不平等 エレファント・カーブが予測する未来	みすず書房	2017
ヘンリー・ミンツバーグ	私たちはどこまで資本主義に従うのか 市場経済には「第 3の柱」が必要である	ダイヤモンド社	2015
デイビッド・ヨッフイ、 マイケル・クスマノ	ストラテジー・ルールズ ゲイツ、グローブ、ジョブズから学 ぶ戦略的思考のガイドライン	パブラボ	2016